

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 蓮田隆志	提出日：平成 22年 11月17日
東南アジア研究所における職名： * 右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ポスドク・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名及びカウンターパートの研究者名)： 国名：オーストラリア 機関名：オーストラリア国立大学アジア・太平洋研究院 カウンターパート研究者：リ・タナ (Li Tana) * 派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所○をつけてください。(大学・研究機関・企業・その他)	
派遣期間：平成22年5月26日 ~ 平成22年8月8日 (派遣日数：75日)	
研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可) ①研究・実験、②フィールドワーク、③セミナー、④インターンシップ、⑤サマースクール等の講習、⑥学会出席、⑦単位取得等、⑧その他	
研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。) ①人文学、②社会科学、③数物系科学、④化学、⑤工学、⑥生物学、⑦農学、⑧医歯薬学、⑨総合領域、⑩複合新領域	
派遣の概要(500~700字程度) グローバル化の進展は、移民や出稼ぎ労働者といった形で人の流動性を大きく高めている。従来の移動する人々を外来者と位置づけ、地域の外在的要素と見なす理解は根本的な修正を迫られている。人々の国境や文化圏を越えた移動を組み込んだ地域理解の枠組みが求められているが、これは分析概念の更新という学問的要請というよりも、現代社会そのものの変動を理解するための現実的課題である。このような新たな枠組みの構築において、歴史的に人の流動性が高かった東南アジアは、長期的・歴史的な文脈からこの問題に取り組むことができる点で優位性を持っている。報告者は、東南アジア発の社会発展モデルとして提示するべく、東南アジア地域社会の形成過程を歴史的に分析する。 派遣先のオーストラリア国立大学アジア・太平洋研究院文化・歴史・言語学部(ANU College of Asia & the Pacific, School of Culture, History and Language)はオーストラリア随一の研究機関であり、本課題に関連する多数の専門家を擁する。直接の研究対象であるベトナムについても、複数のベトナム(史)研究者が所属しており、専門家が各地に分散している日本では難しい高度で密度の高い議論を集中的に行うことができる。 今回の派遣では、報告者は約2ヶ月半同校に滞在し、同校図書館が所有する史資料も活用しながら、所属研究者・若手院生とプライベートな場も活用して意見交換を行いつつ、主として次の(1)歴史編纂を通じた歴史意識の共有空間の形成、(2)一族史の編纂事業を通じた族意識の発達とその普及および「伝統」化、という2つのテーマについて研究と論文化を進めた。	
事業に係る研究成果(500~700字程度) 派遣先からは滞在期間のほとんどを通じて、研究個室、インターネット接続環境(ブロードバンド)、長期貸出及び電子史資料を含む図書館所蔵資料の全面的利用許可の便宜を得た。 当初予定ではカウンターパートや個人的知己とのプライベートな意見交換のほか、滞在期間中に毎週水曜午前開催の全学セミナーにて2度の研究報告を行う予定であったが、この場合は所属教員だけでなく博士候補生の報告会の場も兼ねており報告希望者が多かったため、派遣の概要欄掲載の2つのテーマのうち、(1)を取りあげて研究報告を行った。またその際に主催者側より、日本で日本語で発表されるベトナム前近代史および東・東南アジア近世史の研究動向についてのレビューを強く求められたため、報告内容よりもやや広い範囲についての研究動向紹介を行ったが、日本語での研究についても大きな関心が寄せられていることが感じられた。過去の研究についても翻訳などを通じて積極的に紹介してゆく価値が大いにあるだろう。報告内容については現在投稿準備中だが、一部を国際学会にて報告する予定である。 また、派遣期間中にカウンターパートの併任期間である Centre for the Study of the Chinese Southern Diaspora が「ベトナムの華人」についての国際ワークショップを開催したため、これに参加しコメンテーターを務めた。ここでも主催者の求めに応じて、日本での華僑・華人史研究の動向について紹介を行ったが、これは同センター発行のウェブ雑誌(Chinese Southern Diaspora Studies)に掲載予定である。	